



諸國
 方言
 物類稱呼
 衣食
 財器
 四

ホ 2
 619
 4



物類稱呼卷之四

器用



注連
屋臺

志め○祀前の長湯にて。かんぢやうと云本國もが好まう前迄
やたい○東國も。やういと云大坂及舟も。だんぢやうと云古坂にて。ん
またいと云江戸の舟れよ。一万座大麻の形を制て万座と云。又を
かざる飯たぐいと云又だうと云物を之根園祭の餅やうといふ

今梅にかんぢやうとハ勸讚とらふこと也神代といひつるんぞと
あふへ

紙手

かうで○江戸にて。をがごと云大坂及泉原と云。かうでと云仲屋及云
佐と。こうぢやうと云今梅にやうといふとに口と云まきとてはよと名付る
云又云佐とハ幸ととまう

刀頭海平の

箱板

いふことゝ）糸の屑をにのねきと云々肉をて。こけたをとよまと云々
 之のこびけらと云々上野の徳まで。せんじと云々下野佐世にて。か
 げと云々奥の津軽まで。せんじと云々遠野にて。かきことよま一戸田全にて。
 々をとよまと云々和歌まで。せんじと云々今按に東國を後とよまと云々
 々一ハ昔ハ篠竹をとよま寸半に切てをのとよまのやくとよま製とよまの中にとよま
 てのとよまと云々とよまを世徳とよまよりして制する便利なる物までとよまの葉と
 夫ひにとよまよりと云々とよまのとよま後とよま和漢三才圖會にとよまたる
 からとよまのとよまのとよま○とよままで。まとよまびとよまをとよま東國まで。くらりとよまと云々とよま
 まで。あうとよまと云々中わ及とよまままで。からとよまやと云々とよま後にて。づとよまりとよま
 からとよます○とよままで。からとよまと云々とよま肉まで。くらりとよまと云々とよまのとよま
 まで。ぢとよまぢとよますとよま今略してとよまと云々又殺する白とよま農家にてとよま
 さらとよますとよまのとよまにとよまと云々

確

連板

拐

およことよま○とよまかとよまりとよま○とよま中及西國まで。あとよまこととよまをとよまにて。らとよま
 ととよまひとよまて。○とよまと云々○とよまにて。てとよまひとよまりとよま
 まで。たとよまのとよまと云々とよま後まで。かとよまげとよまりとよまと云々とよま奥のとよままで。かとよまづとよま
 げとよまと云々とよままで。あとよまひとよまりとよまと云々大坂及とよま或ハとよままで。あとよまこととよま九とよま
 まで。ろとよまくとよまりとよまりとよまと云々とよま後まで。りとよまと云々とよま古今とよま俳諧とよまに
 一人とよまこれとよまと云々とよまにとよまひとよましてとよまあとよまこととよまと云々とよまりとよまれ
 是ハあとよまこととよまと云々とよまと云々
 ふるとよまびとよま○とよままで。りとよまと云々
 かとよまりとよま人とよま形とよま○とよままで。をとよまと云々とよまかとよまりとよま把とよまにて
 ○とよまと云々
 ○とよまと云々又とよまをとよま把とよまにて。うとよまと云々とよま内
 まで。つとよまがとよまりとよまりとよまにて。ととよまあるとよまにとよま後まで。ととよまかとよまりとよまはとよまき
 ととよまのとよま徳とよまのとよまと云々とよま田とよまへとよまと云々とよま板とよまにてとよま板とよまと云々とよま

篩

葉山子

勿負海子四

三

つら水の李吟翁のえそづつら水邊に志うけてあの方を流してををよと麻
をいりりり候はる今

「山田の傳那のえそそかろいれ秋果ゆれはつら水に 玄實
今梅まかぢよて。と下きと云 **藝文類聚** にいある弾秋其制異ある

やしにおもはるそ又備中玉湯川守の玄實傳那の志事又傳那の
の海八哥書の流解 **雜華筆海** **和字正濫** 等の流説考合せて分辯

又又ふくにて其形異あるあぢよとていとも事勢なれはこに略と
ちまると **機** の具 ○ 冥あまて。らまう冥あまて。をまると云

きぬまき **まぐね** ○ 冥あまて。きぬまき **まぐね** 記あまて。ちまう東國にて。ま
かすまう下伝まで。まへかすこと云

機 機 **まねき** ○ 系伝もたに。まねきを記あまて。いのこと云
かざり **機** **かざり** ○ 冥あまて。かざり **武刀** 記あまて。かけいと記あまて。あまび

下伝にて。あやいとあまにて。あやいと云 **あやいと**
あせ竹 **あせ竹** ○ 冥あまて。あせ竹とてと東あまて。あやたけ云
くさ **あせ竹** ○ 冥あまて。くさとてとあせ竹とて。あせ竹とて。
志うとてい

抄

い 校同 歳 ○ 今梅に二系ともには記あまの志事 **あせ竹** **あせ竹**
光陰のうつろふを記あまを記あま又李白の鳥夜啼詩 **機中織錦秦川**
女碧紗如相隔 **機中織錦秦川** **機中織錦秦川** **機中織錦秦川** **機中織錦秦川**
和て肉心のあせ竹人をしてとてとあせ竹 **あせ竹** **あせ竹** **あせ竹** **あせ竹**
ひらふに記あまにたてとてとあせ竹

尺

ものさし **あせ竹** ○ 武刀の然して。あま **あせ竹** **あせ竹** **あせ竹** **あせ竹**
わああめ ○ 系伝あまて。あせ竹 **あせ竹** **あせ竹** **あせ竹** **あせ竹**
あちま又の志のまた尾張にて。あめ越はる。志の武藏。志の志の

綿筒

物類考 卷四

杵

ひ及安房上総常陸... さいづち... さいづち... さいづち... さいづち... さいづち...

釘

てをの... のこぎり... のこぎり... のこぎり... のこぎり...

鋸

ろろぐ... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご...

秤

せに... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご...

錢

ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご...

筍

いさぎ... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご...

椀

こん... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご... ちびご...

○物類... 江戶ハ勿論...

今按にこまると申 卑賤の何れあらずるべし 續日本紀に御器膳と
 も又ちやうぎと云へるハ別事蓋し然らずやうぎ膳ぢやうぎ振ぢやう
 き箸ぢやうぎ又わづらひといふ今の椀の制とハかた又ア今の世に椀と云
 物いづへハ入合子かといひ也 膳囊抄に云くやう 平家物語に本居
 義仲精進がりの詞あり 職人盡奇合いあをがりかどの河あれを
 因幡の産と上京とせしにや。今も年の初に門松につくる藁合子と云
 物もたゞ詞なり ○大峰の雲目のつらうにて人々仇借連奇せしに
 せむれ家多うまれにおけしる器物くくするも席にけええれハ
 「大峰の雲目のあつらひのちのまゝあつらひしるらん」てんませんも李吟
 ○平ひらぢぢ ○ト膳なる物なすて。ひがきとらふ
 ○四し ○堂後及中野にて。かにかとらふ
 ○坪ひら ○肥前佐賀にて。のそとて。○け ○をなすて。をてせと

云又食膳を俗に猪といはれども猪ハ飯食を兼備ふる此物也又俗
 に折敷ハ食札といふハ食をさしとらふと

猪

ちよく ○膳及そののぶきと云はるにても底深さを。のぶきらう
 といふ又福建及朝鮮の方言に鐘を呼てちよくと云

盆

がん ○申ふとて。ぼにとらふ 舟に茶をらに紫菜を
 ちまたとらふとらふといひて

沮板

まふら ○膳阿及上膳とて。まうそんと云ハ膳或ハ其の伴物とて。はい
 んと云信濃とて。まれいといふまふら魚魚といふハ魚菜とたると
 けう後菜とあるといひて魚とまふらといふ

摺鉢

すりばち ○江戸とて。まうらぶら大坂とて。まわとて。まら山陽道及河
 まで。かづあまとて。すりこのまらたりふ赤玉の女言た。ちかちと云と
 及出羽とて。いせむらあまとて。らいとて 摺盆 用之所とて。かいらけとら
 とらふ

摺粉木

すりこぎ ○江戸にて。さうりこぎみ炭口及石園中ふじまにて。れんぎと云
おやまて。めぐり越後まで。めぐり又まうぎとも云出烟。めぐりこぎ
は押まで。まひぎとも

塘昇

たうのう ○あまて。をまきまじ戸大坂に。ぶよのう小陸及及自湯
伯野或は佐まで。せんむとも云出南船にて。ひらきとも云今梅遍大
ひらきと別と云うる。墨まよのうと云物也炭釣是江戸にてまぶりの
合類節用（とらう）に十五八冥宮の像の



鉄灸

てんきう ○上総及信濃越後まで。てんきとも云仙墨にて。こごとも云
めーびつつぎ ○京にて。いご上総上総常陸にとも。本居まで。あ
まご伊勢まで。さうりいごとも

飯櫃

まご伊勢まで。さうりいごとも
きせぬ ○江戸にて。ませぬあにて。ませぬ伊勢まで。ませぬとも云

煙筒

さるるおおにて。あひの煎餘多ありたたり。江戸まで。奇骨障。うぶ物を京
にて。ごがひらきまひら。ごがれ川田に受けた秋の田のかりほの伊勢寄
巻ひ置行れ。川田に。れ。ご。雅。あ。い。ん ○大田。京。え。い。い。た。て。
かんび伊勢にて。ハ。ご。く。ら。よ ○班竹。ハ。羅。宇。國。う。り。お。を。致。に。その。あ。あり
羅。宇。國。ハ。南。天。竺。の。内。暹。羅。の。石。障。あ。し。又。ま。せ。る。の。脂。を。大。坂。に。て。ハ。ご。と。云
た。ま。こ。これ ○薩摩國の紫文。の。ん。ご。と。云 ○か。の。あ。の。形。に。相。とり。て。制
する物。提。統。卵。又。ハ。提。た。こ。入。あ。よ。物。に。形。は。提。と。も。も。ま。の。考。又。提。と
ご。入。を。紙。は。して。ハ。ご。や。ら。う。とも

煙盒

今梅。や。り。り。ハ。美。苑。の。界。中。あ。る。一。世。に。市。花。と。梅。と。物。ハ。じ。一。卵。石
や。肉。と。入。る。蓋。に。て。竹。とり。て。か。く。花。と。制。腰。に。は。れ。る。と。め。なり。り。今
茶。を。好。む。目。も。な。れ。や。ら。う。とも。い。い。ひ。ま。せ。ら。ん

釜

かま ○江戸にて。作。じ。る。かま。め。い。を。煮。肉。及。あ。ま。は。國。代。に。こ。か。ま。と
物。頂。海。半。白

てんてんてんてんてん 又...に...
てんてんてんてんてん 又...に...
てんてんてんてんてんてんてんてん

と梅に上世かびと...
かびと女房のまの浦里にかまむら...
はたおあげられて...
電と称せり...
ひべ〇...
和泉国堺の南に一路菴といふ...
上人...
ろを一路と回ひ...
に国をハ
相にて制

鍋

つちき 泉...
をとり ...

へらり...と...
て...と...
〇...
ひ...
て...
こ...
ち...
民...
ま...

杓

茶碗

ち...
民...
ま...

鑿

いりあへ○系にて。うりこらちわ及東園にて。かろりくちぼそいり
がら常陸まそちやりトとよ

と按にいりあへ俗にうりかろりまそりーとらうりかろり又うりらりとのあは
にいりあへりの材竹なりー又けりろくはわりの器とよまは是鑿の

屬たぐひ東雅 下學集

をりて焙炉いかりの字はにてやいろとよほいろは火か火ひ
なりとまはしめて火の香とよとろりかろりまそり又うりかろりとのあは
とらひて今の制とハ形ろりいりあへ

湯鐘

やくじん○大坂及中野山まで。ちやびんとよまはしめて。いりびんとよまはし
て。てうりまよ ちよの香りに培ていりくま故にちやくじんまよちやくじん
とよ物ろりかろりまよしては鐘をよちやくじんとよハ形ろりまよしてはちやくじん
とよまはしめてまはしめらうりくまよりのよまはしめてちやくじんとよ又茶びんと
制ろりあへり

玉燕

どびん○落摩まよ。ちよとよ同まちよ材をこれとよく。ちよとよハ
いと琉球玉の地名なりとよ赤の人蔭あにちよとよして制ろりゆに
ちよとよとよづく又常陸及ちよ或ハ玉まよとよびんとよまはしめてはて
唱よまよ常陸がどにていりびんとけろりハ半馬の墨丸すみとよまよとよ人の
墨丸の大あるとよとよ武苑の園まよまよのたろりれまよまよる常陸の秋
籠かごとよ玉のあるとよつくま物を胸ぶろり又ちやくじんまよいりまよいりまよ
てうりえ○仙臺にて。ひぶろり常陸まよとよつ留ーあんどまよまよ
日向まよ○へことよ

提燈

あんどん○加賀にて。あんどんとらよ○江戸にていりま。ちあんどんをか賀
まよ。まよーあんどんとよはまよとよ。あんどんとよまよ ちあんどんとらあんと

行灯

まよの器ハ小堀を及度物教書にて制アまよーあんどんとよ
江戸にて。ちあんとよまよのまよ行まよとよあく輪を修まよ及まよのかくたて

蜂 蟬

罟

竹 篾

人 偶

つとまー○券肉そて○しんー東國そて○たがーとつよ
中國ゆまに○こととゆまに○しんー東國そて○たがーとつよ
てのあこ小ちと捕○しんー東國そて○たがーとつよ
あまそ○しんー東國そて○たがーとつよ

たつべ魚魚○しんー東國そて○たがーとつよ
とて成る○しんー東國そて○たがーとつよ
しんー東國そて○たがーとつよ
魚器魚やいしんー東國そて○たがーとつよ

にんぎやうてんじつ○東國ゆまに○おしんー東國そて○たがーとつよ
がしんー東國そて○たがーとつよ
武苑相持女房と名を冠して○しんー東國そて○たがーとつよ
いふたにとも 又東大坂とてしんー東國そて○たがーとつよ

紙 鷲

穀 匣

桶

又東國そて○しんー東國そて○たがーとつよ
しんー東國そて○たがーとつよ
しんー東國そて○たがーとつよ
しんー東國そて○たがーとつよ
しんー東國そて○たがーとつよ

こめびつ○東國ゆまに○しんー東國そて○たがーとつよ
桶にて○しんー東國そて○たがーとつよ
桶をけ○しんー東國そて○たがーとつよ
桶をけ○しんー東國そて○たがーとつよ

柳導の略

漏斗

とつくる人多く 柳導の略 ○上野にて。まびしえ。まびらくひらくふ ふに米
にあら竹蓋に 殺を儀

履

あぶ ○漢靴及靴にて。がくろ。む。ざう。ら。ふ。中国にて。がくろ。ふ。ぐ。く ふに米

草履

さうり ○江戸にて。えがみ。の。う。ま。の。ぎ。り。わ うまのぎりに葡の葉
にして。えがみ の。ま。の。ぎ。り。わ ○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て
○江戸にて。か。ら。の。り つ。の。の。り。て

橈

地下にて。用。る。ハ。制。異。といふ。えがみ。昔。北。叡。山。安。然。傳。正。負。窮。不 いんきょう
して書を読み。カキ。より。て。金剛 は。巻。を。ま。に。持。ひ。て。有。後。と。制
より。えがみ。さうり。世。に。ひ。な。ら。う。り。は。なり あり
かんとき か。か。き ○秀。内。も。の。な。ん。を。ら。ふ と。楳。に。か。き。は。か。き。の。本
と。た。め。て。輪。を。か。い。繩。を。あ。る。草。の。紐。を。つ。け。た。サ。を。尺。を。か。り。あ。る。もの。く あり
北。越。及。東。明。あ。と。に。て。書。香。を。ま。か。か。き。を。指。ひ。付。て。道。法。を。指。さ。ひ あり
系。に。用。め。裁。切。ま。て。し。ん。を。ら。ふ。津。田。の。泥。の。よ。と。り。の。は。て。を。別。か。か。き あり
知。行。が。は。ま。に あり
あ。ら。ら。ひ。さ。う。く。下。靴。は。も。な。く。か。き。の。な。を。つ。ら。う。り。は。なり あり

太平記曰かきと踏う級中申にや又及落入りてと云史夏記山行
衆衆ともそらとすらの鼻之粒ハ又滑き泥をりよの又越前そ山の
ちあれてるる時ハ少人等と齊して跡くらるるに端々をのよあわのり

雨衣

あまふね 和名 ○伊予そのもめんがらをよきかきおとすにのあまふねと
し紀伊そのぢうえんをよきかきおとすにのあまふねと伊予そのぢうえんをよきかきおとすに
今按にぢうえんのひきぢうえんがぢうえんは時雨夜に
清水谷實業のねん

清水谷實業のねん

「お月におのつるのくあをうやむと十月に十八夜にぬそ

中院通茂はけー

「十月にぢうえんをよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに

飯

りや ○か賀及越中又武蔵のよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
まのたいんをよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
羽黒山のり若のこをよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに ○小児の飯
まにひらきおとすにのあまふねとよきかきおとすに

又お宮ふねにのまをよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
これハ借御うまへいせ流の
女河もいごとりハ 上総
下総の小児のむらむらとよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
まをよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに

と後に飯をかたいといふ古き御へた飯を炊くをよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに

かごいふといふ又去佐玉膳多那の境へびあまふねの臨つとまのこをよきかきおとすに
か女のせいふとよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
古事紀 **日本紀** 公等
袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

袁須袁勢をよきかきおとすにのあまふねとよきかきおとすに
今按に東家の農家にて午末の尅の間に合食をよきかきおとすに

物類編 飯

四十六

○こびらまのふもにちみかひきていそふたのひるまといひひらき夜
食のよまこまお飯と寝も終るそうだいごらまは是はひら飯とらふ
そらつらう

粥

わづらひも○加賀にて○さくらづゆと云但馬玉にて○さふまといふ
世俗に早に赤豆粥を煮て祝ふと云二説にそいふも伊豆の國
風まて之為明神の氏子伊豆の皇と云ゆのこを象つて豆之粒入
るより今毎斗て世上の流俗となるといふ 未詳 又正月十日お豆
かゆを煮て都鄙家毎にを食と清少納言枕草子二十五日ハ
もちぢのせくまるとかきーもぶとをなぐーるもたにかゆのち
て女成らるるをさるもいひはる袂衣もいふくうをせし國友
あまの松の枝葉なごにて男根の形をつらて女の腰をうてはるを
らむまひひとく今もさる事之あもむ算帳たりと云らる

奈良

又今日河内小牟婁の神社にト田おとおと云ふ所粥殿に大なる釜とま
小豆粥を煮て神供と一五穀成就の祈念終りて竹と五才ばかりに
伐て爰とまらると五十四年それ五穀及らその種をの五十四年に
多て入る中へ投ド。さて一其爰とらて粥爰の中に入らるるか或お
のか減とてそれれに何の種ハ十分何の種ハ分と神をさるに若登
よとらるひの近宮の農民群をすてトの善惡を書付をこト神トに任
せて農事とつとむる事とこれと牟婁の粥とといト田おと云ふ又或合
粥を自出たごに用らハ粥祝通言ゆなりと云又法おまては日此粥の初
種とらて至て十日の初とを食とらるの糜あま粥あまとらて一年
の風をとら事と云と則十八日粥といふ千金月令 荆楚歲時記の説
爰に略と

なぐらや○大和奈良まで。やぢと云ふ肉也。なぐらやがと云なぐらや

牛養子日記

雑炊

宇陀法師「たがなるまを掃む様の下とらふに
 一若殿たぐの夜八時にくりと李由海より李由近の産亮隅建師
 ぶふまの○河内及播磨のたてのびやうたれと云か賀越中或但馬を
 〇とつづらふ越前を〇おまごま伊勢を〇いれりと云東を〇ごふ
 まい又〇いれりと云婦人の河よ〇おぢやと云又京師正月七日の朔
 月某の塩饅を経ひて食とこれと。うわいと云大坂及堺に〇神棚
 に備ふる雑煮河〇飯のものを茶と集居て糀に漬合とこれを福
 と云こゝがまゝハ倍はハ雑煮と云佐の風をハ正月七日雑煮に縁と云福
 けと云武江の正月方上野谷中江渡宮院に納るゝ大島の湯也
 縁を男女群あますること

雑煮

もち 和名もちい ○雑煮を〇あまごま江戸をハ小見に餅で〇あまごま
 ○雑煮 餅にろうくの茶を煮てあつとよ 雑煮を〇あまごま 雑煮と云又
けいめにけいひをいふ倍をこれと雑煮といふ 雑煮と云

かんとも云江戸をハ形を系にて〇かんとも かんをけいひ 昔に新嘉京市は
 とあれて一麻と梅（俣居も）にありたりたる事多し又淡路市も
 商人の雑煮若かんごとくして賣付もあつたりかんとも
 ちうあつものといふ〇せんがいもち 神在餅と書し せんがい煮といふは小豆に餅を
 まして〇せんがいもち 書し せんがい煮といふは小豆に餅を
 入て醬油を煮炒種をうけて食す神在煮又善哉煮といふ縁ともなり
 ○かゝ縁法園の通稱へ出するにやるのななりと云東がまゝ〇そゝえ餅
 又〇あぐんを云越後及信濃を〇あぐんを云〇捨餅 捨餅にが刺といふを如て
よふ今又物をそとるをいふ 越後を〇けづ餅と云同まをかし餅をいふと云
 けづ餅と云 けづ餅と云
 ちづけて。ちづ餅といふ商人のちづ餅と云捨餅と云て出せり余は
 かりいむの齒は及なりと云あるのよきと云捨餅といふは あつと云
 越えてね奇ふあまごまといふは

勿負蒲呼曰

〇十八

吾山

餅 牡丹

「ものめの今さら能とく餅のむし後の昔多しき 吾山
○ある餅 ○伊勢にて。あるもち系にて。おんびね園まで。ゆいこせ
めて。おんびね越後まで。おんびね上野及後河まで。おんびね後及常陸下野に
にて。おんびねと云。 漆餅と云。書す。か賀す。のあづき。あつ摩す。おんびねと云。
おんびね 又おんびねのふゆ。又おんびね。とら。おんびねの向り。 ○粟あまびか賀す。おんびねと云。おんびね
よす。おんびねと云。羽衣秋園まで。おんびねと云。上野及越前越後まで。
餅のめしと云。下野まで。おんびねと云。 今按に。おんびねと云。牡丹は。おんびねの
あまびね。中略。おんびねと云。おんびねの。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。
おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。
おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。
おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。おんびね。

團子

又下巻の團子ハ糯米と焼て煮らした小豆の粉を上下に空て椀の中
に。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。
おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。
おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。
おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。
おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。
おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。おんびねと云。

勿負海子四

〇十九

煎餅

白雪

滑飴

見履心 ○出羽秋田にて。とるふふきと云
くちろり ○仙臺にて。とんざりーと云

あるわめ ○煮肉にて。あるわめといふ御座にて。ぎやうせんといふ煮肉にて
○あけめ又ぎやうせん云 水あめはぎやうせんよりもゆー又ぎやうせんは
滑飴を煮てーや又地黄煮とも書けりて下りまらふ

糯米

やまごめ ○煮津軽及豊後産米を。ひんごめと云然米を。りごめと云
加賀にてまら。りごめ秋のころのほらふ

炒

こがー ○東園にて。こがー又ぶつのことふ煮肉皮をまて。ころりといふ云 煮肉
かきりり 上野或は紙おきて。こがーと云 粉のこがー 加賀にて。せきりりこと
つふ 煮肉の皮にいろまぬされたの をいそ。りりことふ煮肉皮及縁取肥をて。か
りせん云 今梅に香煎ハ是和品なる 洛陽祇園町江にたて下谷の
池の端を割ー賣と名産と云こがーといふ割がー一吳なり也とも云

菜菔

くまがーと香煎と云

たいえづけ ○京にて。かづづけといふぬき。ひやくぼんづけと云
東にて。ぼんえづけと云 今梅に武州品川東海寺開山澤庵禪師

割ー初より依て沢庵漬と稱といひつふ 際漬 といふは後をせせらば
又徳寺にて沢庵漬と唱ふと百本漬と云と又沢庵漬は百本の中に
「むら」の身まらうと記すふもおもひやうや初めはうん

烏丸光廣卿の点漆書に初名の傍に同日の論にあふと云又初名は
正とすやハ其福寺花林院別當永縁

酒

さけ ○出羽にて。いさこといふ酒大樽にて。こまのといふ云 今梅にいさ
こといふ羽州羽黒酒などの行者の隠体と云ーを俗人もこれを効ひて
いさこといふ酒也成るこまのといふもをいさこといふ酒也又秀因の書

匠の河に間水といふ今六つづつともふ江戸にては番匠ハグイといふかゝる
の強一河を東國をせんぼくといふ士農の上よりして巧商或遊女野郎
の類い馬士竹葉果もまきそ有様河ありと交に畧と又西国にて久松
といふ名酒も有様酒を言ふと云ふ○江戸にてある酒も味の幸
つる酒と鬼ろといふゆひの類と変化しておれり酒と云瑠州日光
て鬼ごのといふ又後河内にてハ○てりゆんといふ酒

物類稱呼卷四

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

